

地デジ日本方式の南米普及の経験に見る

国際規格競争で日本が勝てる戦略

日本主導の通信規格には、技術面では評価されても海外に普及しないものが多い。地上デジタルテレビ規格の南米への導入を進めた寺崎明氏に、日本が規格競争で世界に勝つ秘訣を尋ねた。

聞き手◎土谷宜弘(本誌編集長)

不況、少子高齢化などで国内市場の伸びが見込めない中で、日本企業の目が改めて海外に向いている。

通信機器や端末も例外ではない。だが、この分野では、国内の規格が海外と異なることが多く、規模のメリットが働き難いことが、日本メーカーの海外展開の足枷となっている。

この問題の本質は、日本が技術開発では最先端を走りながらも、自らが主導する技術規格を世界に普及させる戦略を描き切れていなかったことにあるといっよい。

こうしたなか注目されるのが、日本の地上デジタル放送規格であるISDB-Tの動きだ。日本以外に、南米など計12カ国で採用されており、

ブラジルでは2007年から、ペルーとアルゼンチンでは2010年から放送が始まっている。さらにアフリカやアジアなど多くで導入の機運が高まっているという。

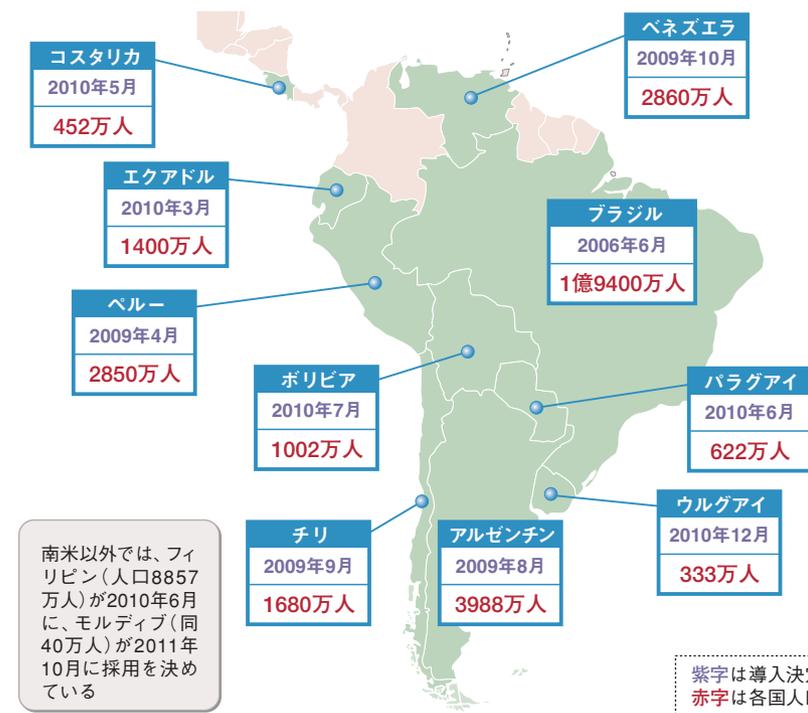
何がこれを可能にしたのか。総務省在職中にISDB-T^{注1}の南米への普及に尽力、現在は野村総合研究所で顧問を務める寺崎明氏に、規格競争に日本が勝つための秘訣を語ってもらった。

10月にインド洋のモルディブ共和国が導入を表明したことで、日本方式の地上デジタルテレビ放送(ISDB-T)を採用した国は全部で12カ国になりました。特に南米では10カ国に採用されていて日本方式が圧倒的に強い。これを南米に売り込んだのが寺崎さんでした。

寺崎 08年7月から総務省を退任するまでの2年間、国際担当総務審議官として海外普及を担当しました。

06年に初めてブラジルで採用されて以降、なかなか導入が広がらなかったのですが、南米の他の国でもようやく地上デジタル放送の方式を決

図表1 南米で日本方式地上デジタル放送を採用した国(10カ国)



注1: ISDB-T(日本方式)

NHKが中心になって開発された日本のデジタルテレビ放送の標準規格。OFDM技術の採用で干渉を回避、電波を有効に活用できる。同一帯域をハイビジョン放送、マルチチャンネル放送、携帯電話向け放送(ワンセグ)など多様な使い方ができることも特徴。2003年に放送が開始された。

注2: DVB-T(欧州方式)

欧州の地上デジタル放送の標準規格。ISDB-Tと同様OFDM技術を採用する。1998年にイギリスで放送が始まった。

注3: ISDB-T International(日伯方式)

ISDB-Tの国際仕様。ブラジル導入に際し同国の要求条件に合わせてISDB-Tを拡張したものを標準化した。海外で採用されているISDB-Tはすべてこの仕様である。日本のISDB-Tと共通する部分が多いが、動画圧縮にH.264/MPEG-4 AVCを導入するなどの改良が図られている。